

書評

寺本千名夫・市川治・志賀永一編著「21世紀北海道農業の先駆け」筑波書房 2001

「新しい農家経営」というのが本書の提起する21世紀の北海道農業を考える上でのキーワードであり、北海道農文協が1992年から取り組んできた研究課題である。奇しくも九州農文協が「生活農業論」と銘打ったシンポジウムを開催したのが1992年である（「生活農業論へのアプローチ - 女性が農業・農村を変える - 」農村文化運動127, 1993.1）。時を同じくして日本の北と南から起こった新たな農家像・農業・農村像の提起は故ないことではない。新しい農家経営像について本書では消費から生産を見直す（画一経営運営見直し）生活から生産を見直す（生活ビジョンの先行）地域から生産を見直す（地域生活の維持）という視点に立つとしている（第2章）。一方九州農文協では女性の視点を軸に、「生活者」のための農業論、「生活重視」の農業論をうち立てるとしている（「生活農業論」農村文化運動153, 1999.7）。重点や視点の置き方は異なるとしても戦後日本農業の基本路線であった生産偏重で規格型の近代化農業の反省の上に新しい農家・農業観を築こうとしている点で共通するものがある。

この点で注目する必要があるのは、たとえば北海道では「生産・生活複合化農業」という言葉が使われ（北海道地域農業研究所『野菜産地形成と生産・生活複合化農業の可能性』地域農業研究叢書No.5, 1992.3）、西日本でも「生産・生活統合型営農集団」という言葉が使われたのもこの頃である（永田恵十郎編「広島県庄原農協における生産・生活統合型営農集団のあり方を考える」平成3年度科研報告書, 1991.7）。後者の報告書に「補論 - 生活の論理 - 」(p30)という項目があり、そこに石見尚『農協』日本経済評論社(1986)が引用されている。そこには東畑精一が晩年に行ったスピーチが紹介されている。

「経済の高度成長の過程で、農村の環境は大きく変わった。私は農業基本政策の相談にのってきたが、私の考え方に誤りがあった。それは私の学問に生活の観点がかけていたことである。これは学者としての私の不明のいたすところで、今後私は筆を折らなければならない」

東畑精一の発言がこの通りだったか、さらにその真意は正確には分からないが、このことについて永田氏は「あまりにも、市場メカニズム一本槍の論理で農業問題が論ぜられる今日、東畑博士が提起した「生活の観点」の理論化は、今後の農業経済学が解明しなければならない重要な課題といえよう」と述べている。

孫引きの孫引きのような引用をして申し訳ないが、北海道農文協や九州農文協における新しい農家・農業観の提起が永田氏や東畑氏の問題提起を直接に受けたものではないだろう。しかし何かの必然性を感じないわけには行かない。

さて、本書は5編11章で構成されている。第1編は2つの序章で、北海道の戦後50年の農業展開を概観し、生産と生活を取り結ぶ今後の方向を示唆している第1章と、「新しい農家経営」の提起を行い、本書の構成を述べている第2章からなる。以下具体的事例を紹介した9つの章が続く。第2章でそれぞれの具体事例についての位置づけと評価がまとめてあるので、詳しくはそこに譲るとして「新しい農家経営」の生産面での特徴を以下の5つにまとめている。第1は、土地利用型経営であること、第2は、経営規模拡大一直線ではないということ、第3は、有畜経営であること、第4は、新しい技術、循環型の技術に取り組んでいること、第5は、地域農業や地域全体と結びついた経営であること、である。次に生活面での特徴は、第1に農家労働の見直し、生活の見直しが行われていること、第2に、都市住民との交流があること、である。

紹介されている事例を簡潔に要約すると、畑作、水田と結びついた糞尿還元のリサイクルを行い、母豚130頭規模の養豚経営を確立している北檜山町・松岡農場の高橋貞光さん(第3章)。米、鶏卵の自家販売を行い、裏山を農家生活、近隣との交流などに活用している厚真町の本田弘さん(第4章)。タマネギの直播栽培の機械化体系を自力で開発し、雇用に依存せずに家族労働の過重を軽減している江別市の高田一美さん(第5章)。特別栽培米、無農薬野菜に取り組み、学校給食や消費者への直売を通じて消費者との交流を行い、景観保全にも取り組む美唄市の「元氣招会」(第6章)。新規参入者で野菜を中心とした産直を行い、堆肥による無農薬・有機栽培の野菜とアイガモ水稲同時作に取り組み、羊の導入や農産加工も取り入れて、中間づくりをしている旭川市の浅野晃彦さん(第7章)。土づくりを重視し、経営規模を重視せず、土地に適した野菜作りを行いながら、綿羊飼育をし、産直を通じて消費者との交流を図っている訓子府町中西康二さん(第8章)。大規模な畑酪農複合経営の法人組織でありながら、自発性を重視した人事を行い、地域環境の保全や直売諸活動に取り組むなど法人のメリットを生かした経営を行っている網走市の卯内原酪農生産組合(第9章)。酪農と肉牛、豚、鶏の複合生産を営み、肉加工品を通信販売等で販売し、地域資源を活用する技術を開発し、生産者ニーズを消費者に知ってもらう活動をしている白滝村岡田牧場(第10章)。開拓の中心地で牛や草地のバランスをとるために、独自の技術を開発し、「低い乳量」でゆとりのある生活を実現している中標津町の三友盛行さん(第

11章)。既に地域で、あるいは全国的にも有名な事例であるが、それぞれの特徴が「規格型」ではない自前の経営や技術、生活、都市との交流のあり方に表れており、著者らのいう「新しい農家経営」が象徴的な形で存在していることが分かる。同時に、これらの取り組みは、時には異端者的な扱いをされてきた事例でもあり、それぞれの苦労の上に成り立ってきたものでもあることが行間から伺える。それだけに従来型の経済重視、効率一辺倒の農政への批判ともなっている。単なる回帰ではない現代的な状況の中での本来農業が持っていた機能を再確認すること、悲壮感から取り組むのではなく「楽しいから」取り組んでいるという姿勢、そして多様な実践例など、本書が意図したものがよく分かる内容となっている。

このように本書は今後の北海道農業のみならず、日本農業のあり方を考えていく上で示唆に富むものであり、「新しい農家経営」としての理論化、定着化が行われれば、まさしく「先駆け」となるであろう。その意味で多少の付言をしておきたい。

九州農文協の「生活農業論」は女性と高齢者の役割に焦点を当てる形で展開されてきた。そして具体的な事例としては農村女性の活動と「集落点検活動」が紹介されていた。その意味ではより「生活」に重点が置かれて「農業論」が語られている。

本書は著者らの解説にもあるように「新しい農家経営」研究会の成果をとりまとめたものであり、事例の紹介を中心としている。反面、理論化という面ではやや手薄な観がある。たとえば「農家経営」という用語である。確かに生産と生活を結合しているから「農家」経営なのであるが、その理論的な枠組み、内容についてはふれられていない。生活を含めた経営をどのように取り扱うのか、理論だけでなく、方法論についても検討が必要であろう。今後、北海道農文協と九州農文協、あるいは関心を寄せる人々との共同研究が進むことを期待したい。

これは評者の独りよがりかもしれないが、「生活の観点」の理論化という永田恵十郎氏が指摘した農業経済学の課題について検討する素材を「新しい農家経営」論が与えたと思う。七戸長生、永田恵十郎、陣内義人という農業経営学の泰斗が「生活の観点」を重視するという視点に立ったということも農業経営学会としても考慮してみる必要があると思う。

(鹿児島大学農学部 岩元 泉)